

経済シリーズ

経済・社会のグローバル化を覗いてみよう!

ファースト・グローバル化と東ティモール



2002年5月の独立式典の様子

ティモールとは現地語で東を意味します。

ティモール島は中国では宋の時代(960・1279年)から白檀の産地として知られ、古くからユーラシア大陸を巡る交易網に組み込まれていました。イムコル・ウォーラスティンやアンドレ・ガンター・ラフンクといった有名な歴史研究者たちは、グロトバルな世界システムの出現をスペイン人による南北アメリカの征服とともに銀の交易が起ったことに見ています。これに対して、私はティモールの白檀交易が世界最初のグローバル化の白檀取引につながったと考えています。

「コロンブスのアメリカ大陸発見とその後の展開」によって、中国やインドそして日本のような長い間技術的な成熟度でヨーロッパを上回っていた国々は、確かに大きな影響を受けました。しかし、アジア太平洋地域では

人類最初のグローバル化は、ユーラシアを舞台にした東西交渉にあった。マゼランによって引き起こされたファースト・グローバル化は、アジア太平洋地域に何をもたらしたのか。今回はジェフリー・C・ガン先生のお話から、「マゼラン革命」要衝の地ティモール島の歴史と新国家東ティモールの現状を覗いてみます。



「マゼラン革命」こそが最も重要な出来事だったのです。ここにティモールも関わってきます。

西回り航路を進んだマゼラン一行のうち、最後の一隻となったエルカノを船長とするビクトリア号は、1522年にティモール島に到達しています。彼らはスペインに帰還後、地球が球体であることのほかに、ヨーロッパにティモールに関する最初の情報をもたらしました。白檀が豊富で、人々は精霊信仰のアミヌトだが好戦的でもあるなどといった知識を伝えたのです。この結果、瞬く間に東回り航路を確保するポルトガルが、マカオをベースにティモールでの白檀取引を独占します。日本の長崎から運び出された銀で手に入れた広東の絹に代わって、ティ



ティモール島の古地図

経済学部

ジェフリー・C・ガン 教授

Geoffrey C. Gunn
メルボルン大学、クイーンズランド大学、モナッシュ大学でアジアの歴史・政治を学ぶ。卒業後、ニュー・サウス・ウェールズ大学(シドニー)、ブルネイ・ダルサラム大学やシンガポール国立大学教員を経て、1994年7月から長崎大学経済学部教授、国際関係論を担当。インドシナ、マカオ、東ティモールなどに関する著作多数。学術誌 Journal of Contemporary Asia の編集委員。



東ティモールとマゼラン革命

2002年5月、国連による2年半の暫定統治を経て、21世紀最初の独立国東ティモールが誕生しました。小スンダ列島にあるティモール島の東半分からなるこの小国は、500年にわたる外国からの干渉や支配に耐えてきたのです。16世紀から1975年まではポルトガルの支配、この間第二次世界大戦中の1942年から45年は日本の支配、そして1976年から99年まではインドネシアの支配下にありました。東ティモール民主共和国としての独立は、こうした苦難の歴史を経て成し遂げられたのです。

1800年代にフランスやイギリスの科学者が訪れ、人類の起源を探る研究をしています。最も有名な人物はイギリスの自然学者アルフレッド・ラッセル・ウォレスです。彼はチャールズ・ダーウィンの協力者でありライバルでしたが、生物の分布境界を示す「ウォレス線」の発見で知られています。この境界に隣接するティモール島はカンガルやユカリの木に固有種がみられます。「マゼラン革命」は島の人々に新しい植物や食べ物を広めました。とうもろこし、別種のタロイモジャガイモ、トマト、ピーマン、タバコなどです。現在でもとうもろこしは人々の主食です。これらの植物栽培は、中国沿岸部やフィリピン、もしかしたら九州などでも、米の生産が困難な丘陵地や山間に広がり、こうした地域の人口増加につながったかもしれません。

しかし、「マゼラン革命」のもう一つの産物はラテンアメリカからインド、中国(マカオ)に至る沿岸地域のクレオール化つまりその地で生まれて本国を知らない人々が増え文化が混交するといった現象が進んだことです。ティモールにとっても、キリスト教の宣教師によって新しい宗教が伝えられたことが重要な出来事でした。今日の東ティモールがブラジルやモザンビークなどとともにポルトガル諸国共同体の一員であることがわかるように、この数百年間で作られてきた新しい社会は、ポルトガルや中国やアフ



ガン先生の著作の数々。奥は『ファースト・グローバル化』(Rowman & Littlefield 出版: 米国マサチューセッツ州ランハム、2003年)

ユーラシア交渉とクレオール化

ヨーロッパとアジアとの学術的な交流の舞台となったのは、中国やインドや日本だけではなく、ティモール島には

1 白檀(びやくたん)
インドネシアから太平洋諸島に分布する香木。日本では仏壇、仏具の材料や線香の原料に使われる。

リカやインドの血が混ざった社会で、人々はいく分クレオール化されたポルトガル語を話しているのです。

2 ウォレス線
生物の分布境界線として最初に発見された。カリマンタン島とスマタラ島の間を通り、西側はトラなどが生息する東洋区、東側はカンガルなどが生息するオーストラリア区に分類される。

3 クレオール化
クレオールとは、元来はフランスの植民地生まれの子どものこと、そこから植民地で生まれた人・もの・言語・文化などは、総称してクレオールと呼ばれるようになった。それらさまざまな社会構成要素の混交現象をクレオール化と呼ぶ。

**日本との政治的・経済的關係**

国連暫定政府は、人口の三分の一が惨殺されるような圧政から東ティモールの人々を救いました。しかし、人々は今日の世界のグローバルゼーションからは取り残されたままです。こうした中、ポルトガルやオーストラリアのほかに、日本は開発援助の最大の貢献国となっています。とくに、電力や水道供給、首都ディリの港湾整備、資本提供などで援助を行っています。NGO（民間）による支援組織（ヤボランディアの団体）も常時活動しています。

2002年2月、日本政府は東ティモールに自衛隊精鋭の工兵大隊550名を派遣しました。しかし、すでに平和が回復してからの派遣は、日本の納税者に多額の負担



収穫したとうもろこしを運ぶ少年



平地部の農耕には、トラクターの代わりに水牛を使う



PKO 当時の自衛隊機



チョンカで遊ぶ少女。チョンカはアフリカ・モザンビークに起源をもつ、石を使ったゲーム

を強いるだけとなり、問題視する声もありました。もうと言えば、そうした資金はJICA（国際協力機構）のような国際的な協力機関や民間のボランティア組織に直接渡した方がよかつたのではないかと考えています。当時東ティモール政府は日本の支援に深く感謝しましたが、市民社会グループは日本のPKO（国連平和維持活動）に抗議し、第二次世界大戦中に人口の約15%が死亡した日本軍の行為に対する謝罪を要求しました。

その後2006年には、大半は浪費されてしまつた外国からの数十億ドルの援助がもたらす正しい成果を巡って反乱軍が蜂起しました。2008年2月にはラモス・ホルタ大統領が反政府勢力に襲撃され、かろうじて一命を取りとめるといった事態がありました。国際社会は1999年に東ティモールを救いましたが、独立後の混乱は現在も続き、雇用や治安の面で人々の社会不安も解消していません。国連の活動で言えば、私は現在日本が議長国である国際平和構築委員会のリストに東ティモールを載せることを主張してきました。今後十数年間は、国連による密接な関与が必要だと思っています。

（訳・編集委員）